

# 女性看護職における嫌悪対象人物に対する感情と認知

## —対人嫌悪傾向と被嫌悪回避との関連—

Characteristics of Interpersonal Emotions and Cognitions for Disliked People among Japanese Female Nurses: Relationship between Disliking Tendencies and Avoidance of Being Disliked

高瀬加容子\*, 河野和明\*\*

Kayoko TAKASE, Kazuaki KAWANO

キーワード：対人嫌悪傾向，被嫌悪回避，ストレス反応

Keywords : interpersonal dislike tendency, avoidance of being disliked by others, stress reactions

### 要約

他者を嫌いやすい傾向（対人嫌悪傾向）と他者から嫌われることを避ける傾向（被嫌悪回避）が、想起した嫌悪対象者に対する感情と認知および職場におけるストレス反応とどのように関連するかを明らかにするため、20～59歳までの女性看護師を対象としてWeb調査を実施した。対人嫌悪傾向は、嫌悪対象人物に対する高いネガティブ感情と低いポジティブ感情と関連しており、多くの対人的嫌悪因子とも正の相関をもっていた。一方、被嫌悪回避は恐怖感情や一部の対人的嫌悪因子とのみ関連していた。対人嫌悪傾向と被嫌悪回避の高低によって回答者を4分類し平均値を比較したところ、対人嫌悪傾向が高くかつ被嫌悪回避が低いタイプは、他のタイプと異なり、嫌悪対象者に対する「尊敬」と「相手への妬み」因子が低かった。また、対人嫌悪傾向とストレス反応との関連が再確認された。

### Abstract

This study aimed to clarify how the interpersonal dislike tendency and the tendency of “avoidance of being disliked by others (ABD)” relate to emotional and cognitive responses toward a recalled disliked individual, and stress reactions in the workplace. A web-based survey was conducted among female nurses aged 20 to 59. The interpersonal dislike tendency was associated with higher negative emotions and lower positive emotions toward the disliked individual, and was positively correlated with various interpersonal dislike

factors. In contrast, the ABD was only associated with feelings of fear and certain interpersonal dislike factors. After participants were categorized into four groups based on their levels of interpersonal dislike tendency and ABD, the scores of the groups were compared. The group with high interpersonal dislike tendency and low ABD showed lower levels of “respect” and the “envy toward others” factors, compared to the other three groups. Additionally, the correlations between interpersonal dislike tendencies and stress responses were replicated.

## 1. 問題

労働者のストレス要因の中で対人関係は最も重要な要因の一つと言える。厚生労働省（2024；「令和6年度版過労死等防止対策白書」）によると仕事や職業生活に関することで強い不安、悩み、ストレスを感じている労働者の割合は82.7%であった。その内容（複数回答）をみると、「仕事の失敗、責任の発生等」（39.7%）、「仕事の量」（39.4%）、に次いで「対人関係（セクハラ、パワハラ含む）」（29.6%）となっている。自殺の原因・動機における「勤務問題」の件数の推移を原因・動機の詳細別にみると令和5年は「職場の人間関係」（27.0%）、「仕事の疲れ」（24.7%）、「職場環境の変化」（19.8%）の順になっており、令和4年からは「職場の人間関係」が最も多くなっている。業務における強い心理的負荷による精神障害の労災請求件数は増加傾向にあり、精神障害の労災請求件数の多い職種（中分類の上位15職種）では「保健師、助産師、看護師」が第2位となり、看護職のメンタルヘルスの課題が浮き彫りになっている。

一般的な看護職の職場は、慢性的な人員不足による過重労働、長時間労働になりがちである。これに加え、医療がますます高度化、複雑化する中、看護職者の行動や判断が患者の命に直接影響を与えかねないため、強い緊張感を強いられている現状がある。また看護職は、人との関わりを中心とする職業である対人援助職の一つである。そこでは、対象者と良好な関係を築き、上司や同僚との人間関係を円滑にこなす能力など人間関係を巧みに調整する能力が求められる（中井，2022）。特に、看護職の主要な職場である病院では、職場における対人関係（上司や同僚との葛藤、コミュニケーションの欠如）に加え、患者との関係から生じる軋轢が対人関係ストレスとなり、さらにはバーンアウトの原因となることが報告されている（久保・田尾，1994）。看護者は生真面目な態度や道徳的潔癖症を保とうとする傾向にあり、医師に比べると約2倍以上の比率でバーンアウト状態、神経症群に該当しているとされる。特に20歳代、および50歳代、臨床経験6～9年の看護者等が精神的不健康状態のグループに属していた（稲岡・宗像，1988）。

一方、看護職務の特徴として、感情労働であることも指摘できる。感情労働とは肉体労働や頭脳労働に並ぶ労働のカテゴリーで、アメリカの社会学者ホックシールドによって提唱された（ホックシールド，2000）。感情労働の定義は、「自分の感情を誘発したり抑圧したりしながら、相手の

なかに適切な精神状態を作り出すために、自分の外見を維持する労働」であり、「公的に観察可能な表情と身体的表現を作るために行う感情の管理」とされる（ホックシールド, 2000）。表層演技として実際に感じていない感情を表面的に表現するだけでなく、深層演技として、自分の感情をなだめ、求められる感情を感じるように加工する感情ワークである。すなわち、職業上の必要に応じて、意識的・無意識的に感情を加工したり、無くしたりしなければならない（ホックシールド, 2000；武井, 2002）。深層演技はかなり意識的なものだが、無意識のうちに自分では認めたくない感情を押しとどめようとし、自分自身が表層演技をしていることさえ忘れてしまうこともある（武井, 2001）。荻野・瀧ヶ崎・稲木（2004）は、対人援助職の感情労働がストレスとバーンアウトに影響を持つことを指摘している。このうちストレス反応に影響が見られたのは、“感情の不協和”であった。このように、看護職は、仕事量の多さや責任の重さといった業務的な条件に感情労働としての側面も加わることで、バーンアウトを引き起こしやすい職種と言える。

そのような中で、対人関係にともなうネガティブ感情は仕事の質やストレスに大きな影響を及ぼすと考えられる。とりわけ対人嫌悪は、長期的なストレス源となり得る感情である。対人嫌悪は、憎悪感情、拒否感情、劣位感情、憐憫感情、恐怖感情など（金山・山本, 2003）、多様な感情成分を含むが、嫌悪対象者に対しては、回避、拒否、攻撃といったネガティブな欲求が強まる一方、親和、依存、援助の欲求が抑えられる（齊藤, 1990）。また嫌悪対象者の存在によって、不安、怒り・攻撃性、抑うつが高まることも明らかになっている（藤平・城, 2014）。結果的に、対人嫌悪感情はしばしば対象者に対する排斥性を高め（たとえば、Vartanian et al., 2016）、ひいては、深刻な対人葛藤の背景になりやすいと考えられる。特に業務を遂行する中では、嫌いな人ともつきあわなければならないので、職場において対人嫌悪感情は無視できないストレス源となっている。

そこで本研究では、対人嫌悪に関わる2種の個人特性について主として検討し、それらが対人感情と嫌悪的認知とどのような関係を示すかを明らかにする。他者に嫌悪を抱きやすい一般的な個人特性については、報告者ら（高瀬・河野, 2023）によって心理尺度（対人嫌悪傾向尺度）が開発されている。この尺度得点は、年代や婚姻状況、子どもの有無などによる差がなく、比較的安定した個人特性であることが示されており、身体的ストレス反応および心理的ストレス反応との相関をもつことが見いだされている。

一方、対人嫌悪に関しては、自分が他者を嫌うという面に加え、他者から自分が嫌われるという面を考えることができる。他者から嫌悪感情をもたれると、前述のように他者からの回避、拒否、攻撃を誘発し、援助を打ち切られる可能性が高まる。したがって、通常、人は他者からの好意を求める傾向にあり（Homans, 1974）、多かれ少なかれ他者に嫌悪感を抱かせないように配慮している。この、他者から嫌われることを避ける傾向（被嫌悪回避）についても、個人差を測定する尺度（被嫌悪回避尺度）が開発されている（河野・羽成・伊藤, 2014）。被嫌悪回避は、他者から自分に嫌悪を向けられることに対する否定的な認知・感情であり、その意味で対人嫌悪の逆

の視点を含んでいる。これら対人嫌悪傾向と被嫌悪回避は、個人の対人方略に影響する重要な要因である可能性がある。

そこで本研究では、女性看護師を対象として、対人嫌悪傾向と被嫌悪回避の高さが嫌悪対象者に対する感情や嫌悪的認知とどのように関連するかを検討する。さらに、対人嫌悪傾向尺度、被嫌悪回避尺度の2つの尺度得点の高低によって調査対象者を4つの型に類型化してそれぞれの特徴を把握することも試みる。すなわち、対人嫌悪傾向および被嫌悪回避の両者とも高いタイプ、両者とも低いタイプ、対人嫌悪傾向が高く被嫌悪回避が低いタイプ、対人嫌悪傾向が低く被嫌悪回避が高いタイプにそれぞれ回答者を4類型化して、特徴的なタイプが存在するか否かを検討する。そして、付加的に、看護師の心理的ストレス反応および身体的ストレス反応との関連についても検討する。

## 2. 方法

### 2.1 調査参加者

調査は2023年4月にインターネット調査会社（株式会社クロスマーケティング）に委託し、Web上で実施された。事前のスクリーニングによって看護師であることが確認された対象者から20 - 50代の各年代にそれぞれ200名ずつが割り当てられ、計800名の有効回答が収集された。対人的心理特性である嫌悪感情には性差が認められている（河野・羽成・伊藤，2017）。また、看護師は女性の比率が非常に高い。そのため、本研究では女性のみを検討の対象とした。その結果、691名（平均年齢39.18歳， $SD = 10.76$ ）が分析の対象となった。

### 2.2 調査内容

調査では、多様な質問項目が投入されたが、本報告で検討対象とした内容は以下の通りである。

- (1) 回答者の基本属性：回答者の年齢、性別等を尋ねた。
- (2) 対人嫌悪傾向尺度：対人嫌悪傾向尺度（高瀬・河野，2023）を用いた。本尺度は対人嫌悪感情のもちやすさを測定するものであり、8項目で構成されている（5件法：1 = まったくあてはまらない～5 = 非常にあてはまる）。高得点ほど対人嫌悪をもちやすいことを示している。
- (3) 被嫌悪回避尺度：（河野・羽成・伊藤，2014）を用いた。他者から嫌われることを避ける心理的傾向を測定する尺度である。10項目で構成されている（5件法：1 = まったくあてはまらない～5 = まったくあてはまる）。
- (4) 嫌悪者に対する感情評定：身近にいる人物で「最も嫌いな人、好きでない人、苦手を感じる人」1名（以下嫌悪対象者）の想起を求めた。嫌悪対象者を想起したときの感情として、肯定的感情である「尊敬」「愛情」、否定的感情である「恐怖」「軽蔑」「嫌悪」「怒り」について7件法（1 = 全く感じない～7 = 非常に感じる）で強度を測定した。

(5) 対人的嫌悪尺度：嫌悪人物の嫌悪的な特徴を測定するために斎藤（2003）が開発した対人的嫌悪尺度を投入した。この尺度は、嫌いな他者の特徴を8種（「自分との相違による嫌悪」「相手への妬みによる嫌悪」「相手の傲慢さによる嫌悪」「相手の自己中心性による嫌悪」「相手の主張過剰による嫌悪」「自分との類似による嫌悪」「相手の外見による嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」）の下位尺度から測定するものである。それぞれの下位尺度は、9項目、8項目、8項目、12項目、6項目、4項目、3項目、3項目から構成されていたが、本研究では回答時の負担を考慮し、各下位尺度の因子負荷量の大きい順から上位5項目を採用した〔「相手の自己中心性による嫌悪」中の2項目（「同性の前と異性の前では態度が違う」「束縛してくる」）は看護師を対象とした調査に適さない可能性があるため、これらを除いた上で上位5項目を採用し、構成項目数5未満の「自分との類似による嫌悪」「相手の外見による嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」の各下位尺度は全項目を採用〕。各項目について6件法（1＝まったくそう思わない・まったくあてはまらない～6＝まったくそう思う・まったくあてはまる）で評定を求めた。

(6) ストレス反応：新職業性ストレス簡易調査票（短縮版）（川上ら，2012）のストレス反応の尺度項目を用いた。この尺度は、心理的ストレス反応18項目および身体的ストレス反応11項目から成り、回答は4件法（1＝ほとんどなかった～4＝ほとんどいつもあった；一部逆転項目）にて取得した。高得点ほどそれぞれのストレス反応が高いと判断する。同尺度のその他の項目（職場の支援、家族の支援、満足度など）や看護師経験年数等も測定したが、本報告では分析に含めない。

## 2.3 倫理的配慮

本研究計画は東海学園大学研究倫理委員会の承認を得て実施された（受付番号2022-2）。調査協力者は研究参加および結果の公表について同意の上で自発的に調査に参加していた。また、本研究に関連して開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

## 3. 結果

### 3.1 対人嫌悪傾向尺度得点および被嫌悪回避尺度得点

以降では、対人嫌悪傾向尺度および被嫌悪回避尺度得点が分析の中心となるので、まずこれら2尺度の概要について述べる。対人嫌悪傾向尺度得点の平均値は28.81 ( $SD = 6.66$ )であり、回答者の婚姻状態（既婚・未婚,  $t(687) = 0.235, ns$ , Cohen's  $d = 0.019$ ) および子どもの有無 ( $t(687) = 0.135, ns$ , Cohen's  $d = 0.010$ ) による有意な差は見られなかった。回答者年齢とは有意な負の相関がみられた ( $r = -.107, p < .01$ )。先行研究（高瀬・河野，2024）では、対人嫌悪傾向尺度得点に年齢の効果は見られなかったため、年齢との関連については今後さらに確認する必要がある。一方、被嫌悪回避尺度得点の平均値は34.21 ( $SD = 8.39$ )であり、回答者の婚姻状態

( $t(683) = 1.057, ns$ , Cohen's  $d = 0.083$ ) および子どもの有無 ( $t(683) = 1.161, ns$ , Cohen's  $d = 0.089$ ) による有意な差は見られなかった。回答者年齢とは有意な負の相関がみられた ( $r = -.135, p < .01$ )。

### 3.2 相関分析

主要な変数間の相関係数行列を示す (Table 1)。対人嫌悪傾向は、ポジティブ感情である「愛情」「尊敬」と有意な負の相関、ネガティブ感情である「恐怖」「軽蔑」「嫌悪」「怒り」との間には有意な正の相関が認められた。この時、「恐怖」については相関係数が比較的小さかった ( $r = .12, p < .01$ )。対人嫌悪傾向は「相手への妬み」以外の対人的嫌悪因子「自分との相違」「相手の傲慢さ」「相手の自己中心性」「相手の主張過剰」「相手の外見」「相手の話し方」と有意な正の相関を示した。「自分との類似」には弱い負の相関が見られた ( $r = -.09, p < .05$ )。

一方、被嫌悪回避はポジティブ感情である「尊敬」との間に有意な正の相関が認められたが、相関係数は比較的小さかった ( $r = .14, p < .01$ )。ネガティブ感情である「恐怖」と「怒り」には有意な正の相関が見られたが、「怒り」との間の相関係数は小さかった ( $r = .09, p < .05$ )。さらに、被嫌悪回避と8種の対人的嫌悪尺度の下位尺度との相関を見ると、「自分との相違」「相手への妬み」「相手の傲慢さ」「相手の主張過剰」「相手の外見」「相手の話し方」と有意な正の相関があった。「相手の自己中心性」「自分との類似」には有意な相関が見られなかった。相関係数の絶対値が.2以上の因子は「相手への妬み」「相手の主張過剰」のみであった。大学生を対象とした先行研究 (河野・羽成・伊藤, 2015) ではこれらにほとんど相関は見られなかったもので、ここで得られた相関は、社会人ないし看護職において生じている可能性がある。

Table 1 主要変数間の相関係数行列 (n = 691)

変数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1.対人嫌悪傾向																	
2.被嫌悪回避	.17**																
3.尊敬	-.18**	.14**															
4.愛情	-.25**	.06	.70**														
5.恐怖	.12**	.20**	.01	-.13**													
6.軽蔑	.26**	.02	-.42**	-.45**	.46**												
7.嫌悪	.33**	.07	-.46**	-.52**	.51**	.79**											
8.怒り	.32**	.09*	-.39**	-.43**	.48**	.75**	.81**										
9.自分との相違	.34**	.15**	-.35**	-.43**	.33**	.53**	.61**	.57**									
10.相手への妬み	.01	.24**	.57**	.46**	.13**	-.24**	-.25**	-.17**	.00								
11.相手の傲慢さ	.33**	.12**	-.31**	-.43**	.52**	.60**	.65**	.62**	.75**	.02							
12.相手の自己中心性	.31**	.06	-.45**	-.48**	.36**	.64**	.66**	.64**	.78**	-.15**	.81**						
13.相手の主張過剰	.26**	.22**	-.01	-.13**	.43**	.30**	.36**	.35**	.61**	.37**	.72**	.53**					
14.自分との類似	-.09*	.03	.34**	.40**	.06	-.13**	-.20**	-.10*	-.05	.60**	.06	.02	.19**				
15.相手の外見	.28**	.08*	-.23**	-.24**	.38**	.52**	.49**	.49**	.55**	.09*	.64**	.63**	.41**	.25**			
16.相手の話し方	.34**	.08*	-.36**	-.44**	.45**	.61**	.65**	.60**	.72**	-.03	.84**	.79**	.60**	.05	.74**		
17.心理的ストレス反応	.28**	.14**	-.01	-.06	.23**	.17**	.20**	.22**	.18**	.15**	.22**	.14**	.23**	.09*	.19**	.19**	
18.身体的ストレス反応	.18**	.07	.05	.01	.18**	.13**	.11**	.12**	.10**	.15**	.16**	.10**	.14**	.15**	.15**	.15**	.75**

\* $p < .05$ ; \*\* $p < .01$

3-8は対象人物についての感情評定, 9-16は対象人物についての対人的嫌悪尺度(各下位因子「～による嫌悪」)

心理的ストレス反応は対人嫌悪傾向と正の相関が認められた。被嫌悪回避とも有意な正の相関が認められたが、相関係数は比較的小さかった ( $r = .14, p < .01$ )。心理的ストレス反応はネガティブ感情（「恐怖」「軽蔑」「嫌悪」「怒り」）と有意な正の相関が見られたが、ポジティブ感情である「尊敬」「愛情」との相関は認められなかった。また、対人的嫌悪因子のすべての変数と有意な正の相関が認められた。

身体的ストレス反応は対人嫌悪傾向と正の相関が認められた。被嫌悪回避とは有意な相関が認められなかった。身体的ストレス反応は心理的ストレス反応同様、ネガティブ感情（「恐怖」「軽蔑」「嫌悪」「怒り」）と有意な正の相関が見られたが、ポジティブ感情である「尊敬」「愛情」との相関は認められなかった。また、対人的嫌悪尺度の下位尺度すべてと有意な正の相関が認められた。

### 3.3 対人嫌悪傾向尺度と被嫌悪回避尺度との組み合わせによる4類型の平均値の差異

対人嫌悪傾向尺度と被嫌悪回避尺度には有意な正の相関があるものの、相関係数は高くない ( $r = .17, p < .01$ )。そこで、対人嫌悪傾向尺度 ( $Mdn = 30$ ) および被嫌悪回避尺度 ( $Mdn = 35$ ) の中央値にて回答者を高低2群に分けた。これにより、対人嫌悪傾向尺度と被嫌悪回避尺度の高低の組み合わせで4つのタイプに類型化した (Figure 1)。

以下ではこれら4類型について、対人嫌悪傾向と被嫌悪回避をそれぞれDとAで表し、その高低をHおよびLで表す。これにより、対人嫌悪傾向が高く被嫌悪回避が高い群をDH-AH群、対人嫌悪傾向が高く被嫌悪回避が低い群をDH-AL群、対人嫌悪傾向が低く被嫌悪回避が高い群をDL-AH群、対人嫌悪傾向が低く被嫌悪回避も低い群をDL-AL群と表記する。相対的に、DH-AH群は、他者を嫌いになりやすいが自分は嫌われたくない群、DH-AL群は、他者を嫌いになりやすく自分は嫌われてもいいという群、DL-AH群は、他者を嫌いになりやすく自分は嫌われたくない群、DL-AL群は、他者を嫌いになりやすく自分は嫌われてもいいという群、ということになる。

		被嫌悪回避 (高)			
対人嫌悪傾向 (低)		対人嫌悪傾向 (低) 被嫌悪回避 (高) (DL-AH群)	対人嫌悪傾向 (高) 被嫌悪回避 (高) (DH-AH群)	対人嫌悪傾向 (高)	
		対人嫌悪傾向 (低) 被嫌悪回避 (低) (DL-AL群)	対人嫌悪傾向 (高) 被嫌悪回避 (低) (DH-AL群)		
		被嫌悪回避 (低)			

Figure 1 対人嫌悪傾向と被嫌悪回避の4類型

DH-AH 群 (n = 208) の平均年齢は 36.68 歳 ( $SD = 9.81$ ), DH-AL 群 (n = 144) は 39.39 歳 ( $SD = 10.89$ ), DL-AH 群 (n = 147) は 39.81 歳 ( $SD = 10.82$ ), DL-AL 群 (n = 192) は 41.26 歳 ( $SD = 11.13$ ) であった。群の年齢には有意な類型の主効果があり ( $F(3, 687) = 6.48, p < 0.01; \eta_p^2 = 0.028$ ), 多重比較の結果, DH-AH 群が他のすべての群よりも有意に若かった (LSD 検定による)。

対人嫌悪傾向と被嫌悪回避に基づく 4 類型によって, 嫌悪対象人物に対する感情と認知に違いがあるか否かを検討するために, 想起した嫌悪対象人物に対する 6 感情および対人的嫌悪尺度の 8 種の下位尺度得点, さらに心理的ストレス反応および身体的ストレス反応のそれぞれについて, 対人嫌悪傾向の要因 (高群・低群) × 被嫌悪回避の要因 (高群・低群) の二元配置分散分析を用いて 4 群 (4 類型) の平均値の差を検定した。これらの平均値を Table 2 に示す。

「尊敬」は対人嫌悪傾向の主効果 ( $F(1, 687) = 21.16, p < .001; \eta_p^2 = 0.030$ ), 被嫌悪回避の主効果 ( $F(1, 687) = 12.15, p < .01; \eta_p^2 = 0.017$ ), および交互作用 ( $F(1, 687) = 6.79, p < .01; \eta_p^2 = 0.010$ ) が有意であった。下位検定の結果, 被嫌悪回避低条件における対人嫌悪傾向の単純主効果 ( $F(1, 687) = 25.38, p < .001; \eta_p^2 = 0.036$ ), および, 対人嫌悪傾向高条件における被嫌悪回避の単純主効果 ( $F(1, 687) = 18.75, p < .001; \eta_p^2 = 0.027$ ) が有意であった。他に有意な

Table 2 想起した嫌悪対象人物に対する感情と対人的嫌悪尺度得点, および  
ストレス反応について 4 類型ごとに示した平均値: ( ) 内は  $SD$

		DH-AH	DH-AL	DL-AH	DL-AL
感情	尊敬	3.55(1.93)	2.73(1.80)	3.82(1.64)	3.70(1.56)
	愛情	2.93(1.70)	2.46(1.69)	3.41(1.60)	3.39(1.60)
	恐怖	4.12(1.97)	3.47(1.92)	3.87(1.74)	3.34(1.64)
	軽蔑	4.25(1.83)	4.58(1.82)	3.80(1.59)	3.54(1.64)
	嫌悪	4.84(1.74)	5.05(1.71)	4.09(1.68)	3.86(1.68)
	怒り	4.65(1.68)	4.60(1.80)	3.84(1.59)	3.67(1.60)
対人的 嫌悪 尺度	自分との相違による嫌悪	21.93(6.09)	21.31(6.13)	19.36(5.79)	17.76(5.93)
	相手への妬みによる嫌悪	16.18(5.36)	12.72(5.60)	15.15(5.30)	14.30(5.00)
	相手の傲慢さによる嫌悪	20.78(7.50)	20.74(7.62)	17.77(6.78)	16.17(6.35)
	相手の自己中心性による嫌悪	20.03(6.96)	20.83(7.01)	17.78(6.71)	16.61(6.46)
	相手の主張過剰による嫌悪	21.14(5.64)	19.54(6.31)	18.89(5.62)	17.10(5.50)
	自分との類似による嫌悪	9.37(4.21)	8.61(4.27)	9.62(4.27)	10.10(3.93)
	相手の外見による嫌悪	9.71(4.18)	9.49(4.26)	7.78(3.29)	7.96(3.25)
	相手の話し方による嫌悪	11.85(4.43)	12.10(4.38)	9.96(3.98)	9.49(3.84)
ストレス 尺度	心理的ストレス反応	44.68(11.13)	42.67(11.66)	39.27(10.56)	38.46(9.86)
	身体的ストレス反応	23.28 (7.49)	23.02 (6.95)	21.51 (6.64)	21.55(7.42)



単純主効果は見られなかった。これらの結果は、DH-AHとDL-AHの間、DL-AHとDL-HLの間にはそれぞれ有意差はなく、DH-ALとDL-ALの間、および、DH-AHとDH-ALとの間にはそれぞれ有意差があることを示している。したがって、DH-AL群のみが他の群より尊敬が低かったと言える。

一方、「愛情」は対人嫌悪傾向の主効果 ( $F(1,687) = 30.58, p < .001; \eta_p^2 = 0.043$ ) のみが有意であり、対人嫌悪傾向が高いと「愛情」が低かった。これに対して、「恐怖」は被嫌悪回避の主効果 ( $F(1,687) = 17.49, p < .001; \eta_p^2 = 0.025$ ) のみが有意であり、被嫌悪回避が高いと「恐怖」が高かった。「怒り」と「嫌悪」は、対人嫌悪傾向の主効果のみが有意であり（それぞれ、 $F(1,687) = 46.38, p < .001; \eta_p^2 = 0.063$ ,  $F(1,687) = 54.20, p < .001; \eta_p^2 = 0.073$ ）、対人嫌悪傾向が高いと各々の感情が高かった。「軽蔑」は対人嫌悪傾向の主効果 ( $F(1,687) = 31.23, p < .001; \eta_p^2 = 0.043$ ) および交互作用 ( $F(1,687) = 4.75, p < .05; \eta_p^2 = 0.007$ ) が有意であった。下位検定の結果、被嫌悪回避高条件における対人嫌悪傾向の単純主効果 ( $F(1,687) = 5.95, p < .05; \eta_p^2 = 0.009$ )、および、被嫌悪回避低条件における対人嫌悪傾向の単純主効果 ( $F(1,687) = 29.50, p < .001; \eta_p^2 = 0.041$ ) が有意であった。対人嫌悪傾向高条件における被嫌悪回避の単純主効果 ( $F(1,687) = 3.04, p = .082; \eta_p^2 = 0.004$ ) は有意傾向にとどまった。他に有意な単純主効果は見られなかった。対人嫌悪傾向が高いと軽蔑が高まり、特にDH-AL群がDH-AH群より「軽蔑」が高い傾向と言えるが、個別の群に特有の差異は不明確だった。

対人嫌悪傾向が高い人は、嫌悪対象人物に対する「嫌悪」「怒り」が高く、「愛情」は低いと言える。「恐怖」は、対人嫌悪傾向の影響は弱く、被嫌悪回避が高い場合にのみ高まった。「恐怖」については、他のネガティブ感情とは異なり、もっぱら他者からの嫌悪を避ける傾向が関与していると考えられる。これらネガティブ感情の主効果のみが有意であった感情については、すべて相関分析の結果から推定される差異であったが、「尊敬」のみは被嫌悪回避の高低によって対人嫌悪傾向の効果が異なり DH-AL群のみが他の群より有意に低かった。

対人的嫌悪尺度の8因子については、「相手の傲慢さによる嫌悪」「相手の自己中心性による嫌悪」「自分との類似による嫌悪」「相手の外見による嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」において、対人嫌悪傾向の主効果（それぞれ、「相手の傲慢さによる嫌悪」 $F(1,687) = 48.24, p < .001; \eta_p^2 = 0.066$ ；「相手の自己中心性による嫌悪」 $F(1,687) = 38.01, p < .001; \eta_p^2 = 0.052$ ；「自分との類似による嫌悪」 $F(1,687) = 7.42, p < .01; \eta_p^2 = 0.011$ ；「相手の外見による嫌悪」 $F(1,687) = 35.39, p < .001; \eta_p^2 = 0.049$ ；「相手の話し方による嫌悪」 $F(1,687) = 49.02, p < .001; \eta_p^2 = 0.067$ ）のみが有意であり、有意な交互作用は見られなかった。「相手の傲慢さによる嫌悪」「相手の自己中心性による嫌悪」「相手の外見による嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」はすべて、対人嫌悪傾向が高いとそれぞれの評定が高かったと言える。これに対して「自分との類似による嫌悪」は逆に、対人嫌悪傾向が高いとそれぞれの評定が低かったと言える。一方、「自分との相違に

よる嫌悪」「相手の主張過剰による嫌悪」は、対人嫌悪傾向の主効果（「自分との相違による嫌悪」 $F(1,687) = 43.99, p < .001; \eta_p^2 = 0.060$ ；「相手の主張過剰による嫌悪」 $F(1,687) = 28.08, p < .001; \eta_p^2 = 0.039$ ）と被嫌悪回避の主効果（「自分との相違による嫌悪」 $F(1,687) = 5.80, p < .05; \eta_p^2 = 0.001$ ；「相手の主張過剰による嫌悪」 $F(1,687) = 14.66, p < .001; \eta_p^2 = 0.021$ ）が有意であり、交互作用は見られなかった。いずれも、対人嫌悪傾向が高いほど、被嫌悪回避が高いほど、評定値が高かったと言える。

交互作用が見られたのは「相手への妬みによる嫌悪」であり、被嫌悪回避の主効果（ $F(1,687) = 27.83, p < .001; \eta_p^2 = 0.039$ ）および交互作用（ $F(1,687) = 10.17, p < .01; \eta_p^2 = 0.015$ ）が有意であった。下位検定の結果、対人嫌悪傾向高条件における被嫌悪回避の単純主効果（ $F(1,687) = 36.22, p < .001; \eta_p^2 = 0.050$ ）が有意であり、また、被嫌悪回避低条件における対人嫌悪傾向の主効果（ $F(1,687) = 7.25, p < .01; \eta_p^2 = 0.010$ ）が有意だった。他に有意な単純主効果は見られなかった。これらの結果は感情評定「尊敬」と同様であり、DH-AHとDL-AHの間、DL-AHとDL-ALの間にはそれぞれ有意差はなく、DH-ALとDL-ALの間、および、DH-AHとDH-ALとの間にはそれぞれ有意差があることを示している。したがって、DH-AL群のみが他の群より「相手への妬みによる嫌悪」が低かったと言える。

さらに、心理的ストレス反応と身体的ストレス反応において、同様に平均値の差を検討した。心理的ストレス反応においては、対人嫌悪傾向の主効果（ $F(1,687) = 33.44, p < .001; \eta_p^2 = 0.046$ ）のみが有意であり、対人嫌悪傾向が高い人は心理的ストレスが高かった。また、身体的ストレス反応においても、対人嫌悪傾向の主効果（ $F(1,687) = 8.54, p < .01; \eta_p^2 = 0.012$ ）のみが有意であり、対人嫌悪傾向が高い人は身体的ストレスが高かった。

#### 4. 考察

本研究では、女性看護師を対象として、対人嫌悪傾向（高瀬・河野，2023）と被嫌悪回避（河野他，2014）の高さが嫌悪対象者に対する感情や嫌悪的認知がどのように関連するかを、Web調査によって検討した。さらに、心理的ストレス反応および身体的ストレス反応との関連も付加的に検討した。

相関分析から、対人嫌悪傾向尺度得点が高い人は、嫌悪対象者に対するポジティブ感情が低く、ネガティブ感情が高く、「相手への妬みによる嫌悪」および「自分との類似による嫌悪」以外の対人的嫌悪の下位尺度得点が高いことが示された。対人嫌悪傾向尺度は一般的な対人嫌悪傾向を測定する意図で作成されたものである。この尺度の高得点者は具体的な嫌悪対象人物に対する感情評定においてもネガティブ感情が高く、ポジティブ感情が低く、また多くの対人的嫌悪の多くの因子が高かったことは、尺度の構成概念妥当性を示すものと言える。

一方、対人的嫌悪尺度の因子中の「相手への妬み」および「自分との類似」と無相関または負

の相関が見られた。「相手への妬み」の項目は、「自分よりも優れている」「自分にとってうらやましい面を持っている」といったものであり、単純な否定的認知ではなく、対象人物の特性の高い評価を含むものと言える。「自分との類似」の項目は、「自分と似たような嫌な面をもっている」「自分の嫌な面とその人の嫌な面が似ている」といったものであり、単純な異質性の認知ではなく、自分と対象人物との共通性の認知を含むものと言える。すなわち、これらは比較的複雑な対人認知を前提として生じる嫌悪と考えられる。こういった複雑な対人認知による嫌悪は、対人嫌悪傾向尺度の評定時には意識されにくい可能性があり、そのため、結果的に尺度得点として反映されにくくなっているものと推測される。

被嫌悪回避尺度得点が高い人は嫌悪対象者に対する「尊敬」、「恐怖」、「怒り」の各感情が高いことが示されたが、他の感情とは無相関だった。被嫌悪回避と「恐怖」との間に正の相関が示されたことは、先行研究（河野他，2015）の結果と一致していた。全体に、被嫌悪回避は嫌悪対象人物に対する敬意や恐れと関連している可能性があるが、他の感情との関連は弱かったと言える。さらに、被嫌悪回避は、8種の対人的嫌悪因子の「自分との相違による嫌悪」「相手の傲慢さによる嫌悪」「相手の主張過剰による嫌悪」と有意な正の相関があった。他者からの嫌悪を避けようとする人はこれらの側面についての感受性が高い可能性がある。さらに、被嫌悪回避は「相手への妬みによる嫌悪」とも正の相関を示した。「相手への妬みによる嫌悪」は前述のように、相手の優れた点に対する評価が含まれているので、被嫌悪回避が高い個人においてこの評定が高いことは、嫌悪対象人物に対しても肯定的側面の認知が高いことを示唆するだろう。しかしながら、大学生を対象とした先行研究（河野他，2015）では、ここで見られた相関はほとんど示されていなかった。したがって、こういった相関は看護職あるいは社会人においてのみ生じるのかもしれない。大学生と比較して看護職者はより強い社会的葛藤にさらされがちと考えられるので、被嫌悪回避の高さと対人的嫌悪との関連は、比較的強い葛藤を含む社会環境下において現れやすいのかもしれない。

対人嫌悪傾向は、先行研究（高瀬・河野，2024）と同様に心理的ストレス反応および身体的ストレス反応と正の相関が認められた。これは、他者を嫌悪する傾向が高いことが職場におけるストレスの増悪要因となり得ることを改めて示すものである。一方、被嫌悪回避は心理的ストレス反応とのみ正の相関が認められ、ある程度のストレス増悪要因となっていることを示唆するが、対人嫌悪傾向と比べて相関は有意に弱く（相関係数間の有意差検定、 $p = .011$ ）、また身体的ストレス反応とは無相関なので、全体にストレス反応との関連は対人嫌悪傾向より弱いと考えられる。

対人嫌悪傾向と被嫌悪回避に基づく4類型を分析すると、嫌悪対象者に対する感情については、「嫌悪」と「怒り」と「愛情」において、対人嫌悪傾向の主効果のみが有意であり、対人嫌悪傾向が高いと「嫌悪」と「怒り」が高く、「愛情」が低かった。一方、「恐怖」については被嫌悪回避の主効果のみが有意であり、被嫌悪回避が高いと「恐怖」が高かった。これに対して、「尊敬」に

は交互作用が見られ、単純主効果の検定によると DH-AL 群は DL-AL 群より有意に低く、また、DH-AH 群より有意に低かった。とりわけ DH-AL 群は他の群より「尊敬」が低かった。

対人的嫌悪尺度の 8 因子については、「相手の傲慢さによる嫌悪」「相手の自己中心性による嫌悪」「相手の外見による嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」は対人嫌悪傾向の主効果のみが有意であり、対人嫌悪傾向が高ければこれらの評定は高かった。「自分との類似による嫌悪」も対人嫌悪傾向の主効果のみが有意であったが、逆に、対人嫌悪傾向が高ければ評定は低かった。「自分との相違による嫌悪」「相手の主張過剰による嫌悪」は対人嫌悪傾向が高ければ増加するのに加え、被嫌悪回避が高い場合も高まることが示された。これらの結果はおおむね相関の結果を確認するものであった。

「相手への妬みによる嫌悪」は、DH-AL 群が他の群より評定が低かった。前述のように、嫌悪対象者に対する「尊敬」感情においても DH-AL 群は他の群よりも低かったので、この群は、対人嫌悪において特徴的な反応を示していると言える。前述のように、「相手への妬みによる嫌悪」は相手の優れている点についての認知であり、「尊敬」も同様の認知を背景とした感情と考えられるだろう。ここから、DH-AL 群は、嫌悪対象者に対して優れた点を認めようとしない特徴をもつと解釈できる可能性がある。対人嫌悪傾向が高い上に嫌われることに対する抵抗感が少ない個人は、その背景に、他者に対する優越感や優越的な自己認知があるのかもしれない。

心理的ストレス反応と身体的ストレス反応については、両者とも対人嫌悪傾向の主効果のみが認められ、被嫌悪回避の効果は認められなかった。全体に、相関分析の結果と類似するが、心理的ストレス反応では被嫌悪回避の効果も示されている。被嫌悪回避の高さは対人関係における脅威に対する感受性の高さも示唆するので、ストレス反応との関連については、今後より詳細に確認する必要があるだろう。

以上のように、対人嫌悪傾向と被嫌悪回避の両者を考慮することで対人嫌悪の一部の特徴が明らかになった。なお、大学生を対象とした先行研究と部分的に異なる結果が得られているので、さまざまな業務環境の一般社会人や専業主婦などとの比較によって、看護職者の対人嫌悪傾向にどのような特徴が見られるかを今後さらに検討していく必要がある。また、こういった対人嫌悪が利他行動や攻撃行動などの他の社会行動とどのように関連するかを明らかにしていくことも今後の課題となっていこう。

## 引用文献

- 稲岡文昭, 宗像恒次, 1988. 看護者の燃えつきの心理社会的背景. In: 土居健郎監修, 燃えつき症候群. 金剛出版, 85-91.
- 荻野佳代子, 瀧ヶ崎隆司, 稲木康一郎, 2004. 対人援助職における感情労働がバーンアウトおよびストレスに与える影響. 心理学研究, 75, 371-377.
- 金山富貴子, 山本真理子, 2003. 嫌悪対象者に対する感情の構造. 筑波大学心理学研究, 26, 121-131.
- 川上憲人, 下光輝一, 島津明人他, 2012. 平成 21 - 23 年度厚生労働科学研究費補助金 (労働安全衛生総合研究事業) 「労働者のメンタルヘルス不調の第一次予防の浸透手法に関する調査研究」報告書と成果物.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2014. 他者から嫌われることを避ける傾向の個人差. 東海学園大学研究紀要, 19, 155-165.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2015. 対人嫌悪の理由と対処の関係 - 被嫌悪回避傾向を考慮して -. 東海学園大学研究紀要, 20, 127-137.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2017. 日本人大学生における対人嫌悪に関する記述統計と性差. 東海学園大学研究紀要, 22, 80-90.
- 久保真人, 田尾雅夫, 1994. 看護婦におけるバーンアウト・ストレスとバーンアウトとの関係 -. 実験社会心理学研究, 34, 33-43.
- 厚生労働省, 2024. 令和 6 年度版過労死等防止対策白書.
- 斎藤明子, 2003. 対人的嫌悪感情に対する社会心理学的研究. 九州大学心理学研究, 4, 187-194.
- 齊藤勇, 1990. 対人感情の心理学. 誠信書房.
- 高瀬加容子, 河野和明, 2023. 一般的な対人嫌悪傾向を測定する試み. 東海学園大学研究紀要, 28, 31-44.
- 高瀬加容子, 河野和明, 2024. 看護師における対人嫌悪傾向とストレス反応との関連. 東海学園大学研究紀要, 29, 17-25.
- 武井麻子, 2001. 感情と看護 - 人とのかわりを職業とすることの意味 -. 医学書院.
- 武井麻子, 2002. 感情労働と看護. 保健医療社会学論集, 13, 7-13.
- 中井良育, 2022. 高齢者・障害者福祉施設に従事する対人援助職の人材育成策と職場定着策のあり方に関する検討 - 対人コミュニケーション・スキルと職場ストレスの関係から -. 新潟医療福祉会誌, 22, 19-32.
- 藤平亜耶, 城佳子, 2014. パーソナリティ特性と対人ストレスコーピングスタイルがストレス反応に及ぼす影響 - 苦手な他者と嫌いな他者の違いから -. 文教大学紀要生活科学研究, 36, 93-105.
- ホックシールド, A. R 石川准・室伏亜希 (訳), 2000. 管理される心 - 感情が商品になるとき -. 世界思想社.
- Homans, G. C., (1974). *Social behavior : Its elementary forms* (rev.ed). New York : Harcourt, Brace & Jovanovich.
- Vartanian, L. R., Trewartha, T., & Vanman, E. J. 2016. Disgust predicts prejudice and discrimination toward individuals with obesity. *Journal of Applied Social Psychology*, 46(6), 369-375.